
短編集 - 路地裏に積もった手紙 -

小空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集 - 路地裏に積もった手紙 -

【コード】

N8881D

【作者名】

小空

【あらすじ】

ふと、思い立った短いお話を書き溜めていく場所。不定期にゆっくりにのろろ積んでいきます。全部、あなた宛の手紙。

ばかなこと

今日の彼は少し疲れた様子だった。

ベットからわたしが顔をのぞかせると、それに気づいた彼は困ったように笑った。

「待ってて」

短く言うと、彼はスーツを静かに脱いでハンガーにかけた。

そのまま彼はお風呂場へ向かったようだ。

わたしは、心地よい枕に再び顔を埋める。

しばらくすると、彼はシャツを袖まくりした姿で帰ってきた。

「お風呂入れてきた、なんだか今日はゆっくり湯船に浸かりたい気分なんだ」

そう言っただけはわたしの隣に座った。

枕から少し顔を上げると細い手首がちらりと見えた。

彼は最近すっかり痩せた気がする。

ご飯もあんまり食べてないようだし。

それは、あの女の所為。

あの女がここにこなくなってから、彼は少しずつ痩せていった。

あんな女の事なんて忘れてくれればいいのに。

ここには、わたしがいるよ。

そう存在証明したくなって、彼に擦り寄った。

彼は少し笑ってわたしを撫でた。

彼の手は大きくて優しい。

誰に撫でられるのよりも、彼の手が一番心地良い。

わたしの頭からそっと離れた彼の手を視線で追う。

そして、そのまま彼の顔を見上げた。

彼はどこか寂しそうな顔をしていた。

「なあ、俺、どうしたらいい？」

彼の震えた声。

彼の顔を見るのが怖くなって、視線を下に落とした。

すると、ぴとん、と上から水滴が落ちてきた。

驚いて見上げるわたしに、彼は「ごめんな」と言っただけで、わたしに付いた水滴を拭いた。

「今日、あいつに会ったんだ。俺さ、あいつ見ただけでさ、もうどうしたらいいかわかんなくなっちゃって、」

鼻水を啜りながら彼は言った。

「声かけたらさ、あいつ 笑ってたよ。いつもと同じ笑顔でさ・

・俺、」

彼はわたしの頭をずっと摩るように撫でていた。

その所為で頭が上げられない。

泣かないで、泣かないで、ねえ

あなたが泣くと、わたしも悲しいよ

彼に擦り寄る。

わたしをぎゅっと抱きしめて、彼は震えていた。

「お前に、こんなこと言ってもどうにもならないのに、なあ」

彼は少し笑って言った。

見上げた顔は濡れていた。

「 にゃあ」

彼の顔を舐める。

少ししょっぱい味がした。

わたしの嫌いな味だったけど、濡れている彼はとても悲しそうだったから。

「お前は、優しいなあ。もし、お前が人間だったら・・・きつとい女だ」

ふっと、彼の口から息が漏れる。

やっと笑ってくれた。

あなたが笑ってくれたら、わたしは幸せなの。

彼の手の中からずりりと抜ける。

暖かい太腿の上に丸くなると、彼は優しく撫でてくれた。

ねえ、もし わたしが人間だったら、

ピピピピ、と機械音が響く。

彼が慌てて立ち上がる。

わたしも慌てて彼の上から降りる。

「風呂、沸いたみたい」

お風呂場へ駆けていく彼の背中を見つめる。

ねえ、もし わたしが人間だったら ねえ、

「にゃあ」

あなたは、わたしを愛してくれる？

彼女と夏の日

顔を上げると、まっさかさまな彼女。

「あ」

「あ」

間抜けな顔、直後、大きな音。

ドン。

彼女はとても静かで、ミステリアスというよりも何だか得体の知れない存在だった。

クラスの子より少し大人びていて。

俺は今まで接したことのない人間だった。

根暗な奴でもなさそうだし、かといって他の女子のように群れをなすこともしない。

彼女は、孤立した、何か不思議な存在だった。

一度、昼休みに女子が声をかけたことがあったけど、彼女は静かに立ち上がってどこかへ行ってしまった。

人々は皆、「高嶺の花」だとか「高飛車」だと口を尖らせていた。

俺も、一緒になって笑ったが、本当は少し彼女に興味があった。

だから、ある日俺は昼休みの彼女の背中を追ってみた。

彼女は屋上で、コンビニの弁当を開いていた。

長い髪が風になびく、その隙間から覗かせた、どこか冷たい光を持った彼女の瞳に見とれていた。

静かに、屋上のドアを開ける。

「奇遇だね」

なんともわざとらしい、呼びかけ。

彼女はちらりとこちらを一瞥して、再び弁当を口に運ぶ。

「なあ、お前、いつもこんな所で食ってんの？」

彼女からの返事はない。

「クラス的女子みたいに、皆でわいわいしたりしねーの？」

あまりの沈黙、何か話さなければと出てくる言葉は彼女を攻めるようなものばかり。

「すぐさま、俺は慌てる。」

「いや、そういう事じゃなくて」とか「えーと」とか、口を突いて出る言葉は役立たずだった。

「そこ、座っていいか？」

失言への弁解は諦めて、しよげた声で言う。

我ながらなかなか情けない声だった。

それでも、彼女は一度だけ、小さく頷いた。

それから俺は彼女の隣に腰を下ろした。

何も無い、静かなときが流れたけど、不思議と話さなきゃとは思わなかった。

ただ、彼女が隣にいる静けさが心地よくて、この空気を切って話すのは勿体無いと思った。

それから、俺は屋上に通うようになった。

彼女は、何も言わずにいつもの場所に座っていて、俺も何も言わずに彼女の隣に座って昼食をとった。

時々、俺が「今日は温いな」と話しかけると、彼女は「そうね」と小さく頷いた。

決して仲睦まじいカップルのようでは無かったけど、なかなか幸せだった。

彼女も、その時間を嫌っているようでは無かった。

「あなたって、不思議ね」

今日の昼、急に彼女がそう言った。

最初は何のことだかわからなかった。

「もう、誰もわたしに興味なんて無いと思ってたもの。でもあなたは違った、あなたって変わり者ね」

彼女はそういつてパンを一口かじった。

「俺からしてみたら、君の方が変わり者だよ」

「そうね、だから気が合ったのかもね」

そう言つて彼女は綺麗に微笑んだ。

本当に、美しかった。

俺は、彼女の笑顔を呆然と見つめていた。

彼女が好きだと、そう思った。

「ねえ、わたし、あなたのこと嫌いじゃないわ」

ぼんやりとする俺に彼女はそう言った。

そして、そつと俺の唇に口付けた。

時間が止まった、そう、思った。

「な、あつ…え！」

上手く舌が回らない俺にクスリと笑つて彼女は屋上から去つていった。

慌てて食べかけの弁当をしまつて追いかける。

彼女の姿は見当たらない。

俺は呆然と立ち尽くして、自分の唇に触れた。

午後の授業に彼女の姿は無かった。

俺はノートをとる事もせずにはうつつとしていた。

（あれは、告白だったのだろうか？）

うんと悩んで決めた。

（明日の昼、ちゃんと俺から伝えよう、彼女に、聞いてもらわなきゃいけない）

授業が終わると、俺は慌てて鞆を掴んだ。

教室から飛び出して自転車置き場へ駆けていく。

（そつだ、手紙を書こう。彼女、どんな顔をするかな。きっと、今

日みたいに笑ってくれる)
心の底から幸せがぐんぐんと込み上げてくる。
自然と笑みがこぼれる。

キラキラと太陽が何もかもを照らしていた。
彼女も太陽のように笑っていた、ふと、顔を上げる。

「あ」

「あ」

目の前には、じわり、と真っ赤な水溜りが広がる。
白いスニーカーに赤が飛び散った。

地面には笑った彼女。

空にはキラキラと太陽。

俺は所詮彼女のことなんて何もわかっていなかったのだ、と。
そう、気づくまでずっと時間は止まったままだった。

彼の愛、臆病な私

『心から 君を 愛している よ 』
遠のく意識の中で、確かに彼はそう言ったのだ。

「ねえ、ヒロ」

私が声をかけると、眠そうに瞳を擦って彼が起き上がる。
汗が、酷い。

「大丈夫？」

私が問うと、彼は一度だけ頷いて私をぎゅっと抱きしめた。
やはり彼はしつとりと汗ばんでいて（それすらも私にとっては魅力的だったのだけれど、）少し私は心配になるのだった。

「最近、疲れてるんじゃない？」

彼は、最近、少し、ほんの少しだけれどやつれているように見えるんだ。

それでも、彼が一度首を横に振ると、私はあっけなく納得してしま
う。

彼がやつれている理由を深く追求するのが怖いのだ。

私は何も言わずに彼の髪をそつと撫でる。

彼は、ドンと私を押しした。

ベッドにすんとしりもちをつく。

「…ヒロ？」

「…ごめん、仕事行ってくる」

近くにあった目覚まし時計を見て、ああと頷く。

「ご飯、今すぐ用意するね！」

「…いい」

慌てる私に、彼は歪んだ表情を向けた。

急に、きゅっと胸が痛くなる。

「…ヒロ？」

「…嫌い！」

彼の血走った目が私を捉えた。

怖い、ぎゅっと目を瞑る。

次に目を開けたとき、彼の姿はもうそこには無かった。

壁に掛かっていたスーツが消えていた。

「…やっぱり、やつれてる、よね」

ポツンと呟いた声が誰もいない部屋に響いた。

彼に直接聞く勇気の無い自分が情けない。

「う…っ、ヒロ…」

何だか急に切なくなってきた、涙が溢れた。

彼が、わからない。

その日も彼は笑顔で帰ってきた。

朝、急に怒鳴ったのは何だったの？と聞くことも出来ずに食卓に付く。

食事を始めて数分後だった。

彼の笑顔が、どこか淋しげだと気づいたのは。

「…ヒロ？」

気になって彼の名前を呼ぶ。

彼はきゅっ箸を握る手に力を込めて、私を見た。
悲しそうな、目だった。

「ナオミ…俺たち、別れないか」

時間が止まった。

そう思わせるほど、重い、重い一言。

状況も飲み込めず、ぽかんと口を開けて箸を落とした。

カラン、と高い音がした。

なんで？という簡単な言葉が口から出ない自分が憎らしい。

また、聞くのを怖がっているんだ。

固まったままの私をよそに、彼は続ける。

「もう、限界なんだ…このままじゃ、俺はお前を傷つける」

「まって…」

「そうなる前に、お前と離れたい」

貴方と別れる方が、ずっと傷つくよ、胸の中でそう叫ぶ。

「俺はお前が好きだ、お前もきつと俺のことが好きだ…だから」

「だから…別れるの？」

「そうだ…俺がお前を傷つける前に」

意味がわからなかった。

彼の言うことは全て受け入れて、頷いてきた私だけど、今回ばかりは首が動かなかった。

俯いて彼の顔が見れない。

「やだ」

やっこのことで搾り出した声。

「貴方に傷つけられてもいい、貴方と別れる以上に辛いことなんて無い」

私はあふれ出したように、言葉を紡ぐ。

「でも、もう俺は…」

「それでもいい」

「お前を、」

「いいの」

もう、これ以上聞きたくなかった。

「貴方が私に何をしようと、私は貴方を愛してる」

視線を上げると、顔を歪めた彼がいた。

くしゃりと、泣きそうな、嬉しそうな、悲しそうな、顔で彼は静かに座っていた。

私と目があった瞬間、彼が私に近づく。

ガシャンと音を立ててコップがテーブルから落ちた。

ぐちゃり、彼の膝がオムライスを踏みつけた。

テーブルを這って私に手を伸ばす彼。

ゆっくりと目を閉じた。

ガタン！

彼の手は私の首をしっかりと掴んで、椅子ごと私を押し倒した。

驚いて、目を見開く。

勢い良く後に倒れた私は、強く頭を打つたらしい。

痛みよりも前に、あまりにも歪んだ視界に驚いた。

ぼんやりと彼を見上げる、その間も彼の手はきつく、きつく私の首を絞めた。

「毎晩、夢を見てた」

ぱたり、と 頬を液体が伝う。

必死に目を凝らすと、彼は涙を流しながら、くしゃりと笑っていた。

「ずっと こうしたかった」

ああ、そうか…彼は、

ぼんやりと意識が遠のく。

苦しい。

めいっばい、彼に向けて笑う。

「心から 君を 愛している よ」

それが、最期に私が聞いた言葉だった。

混沌とした意識の中、彼の愛を噛み締めながら
った。

私の呼吸は止ま

うつつきの恋

(痛いほど、恋をした)

彼女はそう、思いました。

彼女は誰にでも愛想を振り撒いて、笑っていました。

実質、彼女は本当にみんながみんな大好きなのです。

自分から告白する勇気はないけれど、誰かから告白されれば、それが誰であっても笑顔で付いて行こうと思うほどに。

彼女はみんながみんな、大好きなのです。

あの子が優しい、あいつが可愛い、ああ、選べない！

彼女は毎日幸せでした。

彼に出会うまでは。

始めは彼女も、いつものようににっこり微笑んでいました。

(ああ、あの子も素敵)

それでも、彼女は気づいてしまったのです。

彼は、少し違うのです。

彼を見ると、胸がぞわぞわするのです。

彼が誰か他の子と話していると、心臓がぎゅっと締まるのです。

彼女は苦しみを知りました。

彼女は急に恥ずかしくなりました。

ふらりふらりとしていた彼女は、誰かひとりをこんなに想うのは初めてだったのです。

彼女は恥ずかしくて恥ずかしくて、彼への想いを消そうとしました。

(違うの、違う、あの子はそう、他の子よりちょっとかっこいいから、ちょっとだけお気に入りだけ)

彼女は、彼にも他の子と同じように接しました。

素敵だとも、好きだとも、何度だつていいいました。

それでも、彼と話すときだけ胸がぞわぞわするのです。

毎日、毎日、増していくぞわぞわ。

毎日、毎日、気が付けば彼のことばかり考えていました。

彼女は泣きそうになりました。

彼は何も知りませんでした。

彼は思いました。

(彼女は、誰にでも好きだといって、一途に人を愛することを知らないのか)

ある日、彼女はいいました。

「あなたが好きよ」

彼女は限界でした。

もう楽になりたいと思いました。

彼はいいました。

「そうですか」

彼女は驚きました。

それで、終わってしまったのです。

「それで、お返事は？」

彼女が尋ねると、彼はいいました。

「返事？」

彼があまりにもとぼけるので彼女は、彼女の中身は段々と音を立てて崩れ始めました。

(ああ、この不安定な気持ちが崩れる前に、何とかしようと思ったのに)

「私は貴方を愛しているのよ」

彼女がそういうと、彼はいいました。

「そんな、薄っぺらい愛情で？」

彼女はまた、驚きました。

彼は続けていいました。

「きみは誰にでも好きだと、簡単にいうじゃないか」

彼女は慌てていいました。

「貴方だけなの、本当よ。愛してる」

彼は笑っていいました。

「うそつきめ」

彼女の中身は壊れてしまいました。

彼女の目から、涙は出ませんでした。

「…そう、冗談なの。うそ、なの。全部」

彼女は本当にうそをつきました。

「本当は、あなたも他の人もみんな同じくらい好き。だから貴方だけじゃないの、そう、私、うそつきなの」

彼女は自分に沢山うそをつきました。

壊れた彼女の中身に、うそがいつぱい溜まっていきます。

「もう忘れて。今日はごめんなさいね」

そして、彼女は笑っていいました。

「それじゃあ、さようなら」

(この笑顔を最後のうそにして) (その痛みと共に知った 私は貴
方に、恋をしていた 愛してる)

凌霄花

「いつか、殺して差し上げます」

そう言っつて、女は俺に飯を装った。

何も言わずに食卓に並べられた焼き魚や卵焼きを見やる。

飾り気の無い、なんともシンプルな食卓だ、と小さく苦笑を洩らし、椅子を引く。

トン、トン、と互いの茶碗が向かい合わせに置かれる。

「……どうぞ?」

光の差さない目でチラリと俺を見て、女は俺の向かいに腰を下ろした。

いただきます、と小さく呟いて白い飯を少し箸で取って口へ運ぶ。本当に華奢な女だ、と思った。

「……で、何だよ。仕事で疲れた主人にその言いようは」

ようやく、俺も箸を手にして卵焼きに手を伸ばす。

悪い癖だ、俺はこういう時クスリと笑ってしまう。

「だから、きちんとご飯を用意して待っていたじゃありませんか」

何か問題でも?と女は俺を見上げた。

そういうことじゃないだろ、と俺は溜め息を吐く。

「・・・ふん、可愛くない女」

「それはどうも。・・・その可愛くない女を毎晩抱く貴方は相当な変わり者ですね」

ああ言えば、こう言う。

本当に可愛げのない女に、自然と笑みが零れた。すると、女は不満気に眉を寄せる。

「何です？・・・気味が悪い」

「・・・いやあ、この飯に毒でも盛られているんじゃないかと思っ
てな」

考えても無い事が口を突いた。

こういうのを言い訳というのだろうか。

「そんな事、しませんよ。貴方は私が、しっかりきっかりこの手で
殺して差し上げます」

女は当たり前、というように静かに返した。

ああ 嫌いじゃねえ、と思った。

俺はこいつに溺れた。

「・・・そんな相手に、毎晩飯を装って、抱かれて・・・お前の方
が物好きだと思っかな」

「抱いているのは貴方の勝手でしょう」

「・・・飯は？」

「毎日、食わせてもらっているからです」

「・・・本当に、それだけか」

そこで、カタンと女は箸を置いて俺を真っ直ぐに見つめた。何を言われるのかと、心が揺れる気がした。

すると、女はクスリと笑って静かに言った。

「・・・目でも、眩んだんですかねえ」

、と。

意外な言葉に、俺はとっさに何も言えなかった。

「ほら、あれが・・・きっと私をおかしくしているのですよ」

そういつて女が指を指したのは、庭の凌霄花の木だった。

夏の終わり、花は茶色く色褪せて落ちつつある。

俺が不思議そうに首を傾げると女は笑った。

「あれが枯れて、私の酔いが醒めたら・・・殺して差し上げますよ」

そういつて女は再び箸を手にとって、神経質に魚の骨を取り除いていく。

見やる庭の凌霄花の花が一つ落ちた。

あれの汁は 人の目を眩ますらしい、と誰かが言っていたのを思い出した。

（残念ながら目が眩んだのは俺の方かもしれないな、と小さく笑った）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8881d/>

短編集 - 路地裏に積もった手紙 -

2011年10月3日17時51分発行